

露天資材置場設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

かみすき 5 ごうつか  
紙漉 5 号塚

2021年12月

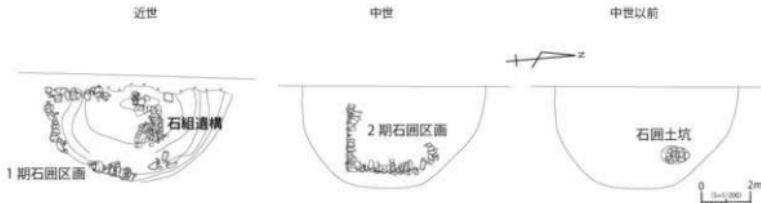
(株)タニモト  
高松市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、紙漉5号塚の発掘調査報告書である。
- 2 調査地、調査期間及び調査面積は、次のとおりである。  
　　調査地　　高松市檀紙町2213-5ほか  
　　調査期間　令和3年1月13日～30日  
　　調査面積　約28m<sup>2</sup>
- 3 本調査を実施するに当たり、高松市、高松市教育委員会、(株)タニモトは「檀紙町露天資材置場設置工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。調査及び整理に係る費用は、全額を(株)タニモトが負担した。
- 5 現地調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員　高上　拓・佐藤　容、同課会計年度任用職員　中西　克也が担当した。
- 6 本報告書の執筆・編集は中西が行った。
- 7 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するに当たって、下記の方から御教示・御協力を得た。  
　　松田　朝由（石材产地等）
- 8 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

## 凡　　例

- 1 本報告の第1図は高松市都市計画図2千5百分の1「高松市街地」を一部改変して使用した。
- 2 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）、方位は座標北を表す。
- 3 遺構・遺物の縮尺については図面ごとに示している。
- 4 土層及び土器觀察表の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
- 5 遺物觀察表の法量で、（）は推定値、〔〕は残存値を表す。
- 6 整理作業の遺物写真撮影は西大寺フォトに委託した。
- 7 遺構遺構の変遷は下記のとおりである。



## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	4
第1節 確認調査の概要	4
第2節 調査の方法	5
第3節 調査成果	6
第4章まとめ	24
第1節 塚の構造と年代	24
第2節 遺物	24

## 挿図目次

第1図 調査地位置図	1	第11図 石組遺構側石実測図	13
第2図 周辺の遺跡分布図	3	第12図 石組遺構周辺出土遺物実測図(1)	13
第3図 塚の位置と確認調査トレント設置図	4	第13図 石組遺構周辺出土遺物実測図(2)	14
第4図 確認調査出土遺物実測図	5	第14図 2期石圓区画平・立面図	16
第5図 塚平・断面図	7・8	第15図 2期石圓区画盛土出土遺物実測図(1)	17
第6図 1期石圓区画平・立面図	9	第16図 2期石圓区画盛土出土遺物実測図(2)	17
第7図 1期石圓区画撤去後の埴丘平面図	9	第17図 地山上層出土遺物実測図	18
第8図 1期石圓区画盛土出土遺物実測図(1)	10	第18図 石圓土坑平・断面図	19
第9図 1期石圓区画盛土出土遺物実測図(2)	10	第19図 表土出土遺物実測図(1)	21
第10図 石組遺構平・断面図	12	第20図 表土出土遺物実測図(2)	22

## 写真図版目次

図版 1-1 調査前風景(南から)	2期石圓区画(南から)
-2 調査前風景(南東から)	-2 2期石圓区画(南から)
図版 2-1 南北土層(北側)(西から)	図版 9-1 2期石圓区画(東から)
-2 南北土層(南側)(東から)	-2 2期石圓区画(東から)
図版 3-1 東西土層(西側)(北から)	図版 10-1 2期石圓区画(東から)
-2 東西土層(東側)(南から)	-2 2期石圓区画(南から)
図版 4-1 表土断面(南東から)	図版 11-1 石圓土坑(東から)
-2 表土断面(西から)	-2 石圓土坑土層(東から)
図版 5-1 1期石圓区画(南西から)	図版 12-1 石圓土坑完掘(東から)
-2 1期石圓区画(南から)	-2 盛土撤去(西から)
図版 6-1 1期石圓区画(東から)	図版 13-1 盛土撤去(北から)
-2 石組遺構・石造物検出(南から)	-2 盛土撤去(東から)
図版 7-1 石組遺構完掘(西から)	図版 14 出土遺物
-2 1期石圓区画撤去(東から)	図版 15 出土遺物

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

本事業の事業者である（株）タニモトにより、当該地で露天資材置場設置工事が計画され、事業者と高松市教育委員会（以下、市教委と略す）で協議を行い、令和2年10月19日に確認調査を実施した。その結果、中世から近世の遺物と石囲区画を確認した。これを受け、令和2年12月16日付けで事業者より文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。届出を香川県教育委員会に進呈したところ、同年12月16日付けで事業者に対し事前の発掘調査を実施する旨の行政指導があった。その後、発掘調査の実施に向けて事業者と市教委で協議を重ね、合意が形成されたため、同年12月23日付けで、高松市、市教委、（株）タニモトの三者で「檀紙町露天資材置場設置工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する調査協定書を締結し、発掘調査を実施することとなった。調査面積は約28m<sup>2</sup>、調査期間は令和3年1月13日～30日までとした。なお、整理作業を含めた全業務の完了までの期間は令和3年12月24日までと定めた。発掘調査と整理作業に係る費用は（株）タニモトが負担している。

### 第2節 調査の経過

発掘調査は令和3年1月13日～30日の間で実施した。調査面積は約28m<sup>2</sup>である。掘削は人力により実施した。まず、表土を掘削して近世の「1期石囲区画」、「石組遺構」とその周辺に点在する石造物を検出した。これらの遺構の平面図と立面図を作成し、写真撮影し、塚表土の南北方向・東西方向の土層図を作成した。遺構に伴う石材を撤去後に塚の墳丘測量を行った。次に盛土を掘り下げて、中世の「2期石囲区画」を検出し、平面図・立面図の作成、写真撮影をした後に撤去した。最後に盛土を完全に撤去し、地山上面において「石囲土坑」を検出し、土層図・平面図の作成、写真を撮影した。塚の南北方向と東西方向の土層図を完成させ、地山まで掘削した状態で写真撮影を行い、調査を完了した。

遺構の平面図は手測りにより行い、調査地に近在する基準点（第3図に表示するT32・T33）を用いて国土地理院第4系（世界測地系）にはめ込む方法を取った。また、土層図・立面図作成時に必要な標高も上記基準点の標高をもとに算出した。

整理作業は同年2月から12月にかけて隨時実施した。まず、2～3月に出土遺物の洗浄・接合と遺物の選別を行い、遺物の実測を終了した。5月に遺構・遺物の図版を作成した。6月から12月に原稿の執筆と編集を行った。



第1図 調査位置図 (1/5,000)

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に位置する高松平野は、西を五色台・勝賀山、南を阿讃山脈、東を立石山塊により画され北方に開けた平野であり、その規模は東西約 20km、南北約 16km である。高松平野は香東川をはじめ本津川・春日川・新川等の河川活動により形成された河成堆積平野である。平坦と思われる平野であるが、主要な河川の本流から派生した複数の自然流路や旧河道、それらの埋没が進んだ低地帯、自然堤防をはじめとする微高地等の存在により比較的起伏に富んだ地形を呈していたことが、微地形分析や発掘調査の成果から判明している。

紙漉 5 号塚が所在する檀紙町は、高松平野の西部に位置し、香東川と本津川という 2 本の北流する河川に挟まれる地域である。調査地周辺は河川堤防から一段下がった平坦地に当たり、田園が広がり、北西側には友常池がある。周辺の標高は 17.0 m 前後である。

### 第2節 歴史的環境

高松平野西部の通時的な歴史的環境は、『相作馬塚』(高松市教育委員会 2015)、『相作馬塚Ⅱ』(高松市教育委員会ほか 2017) にまとめてあるため参考いただきたい。本節では調査対象地である檀紙町周辺における中世から近世にかけての遺跡を概観する。

西打遺跡では 11 世紀後半～12 世紀前半に区画溝を伴う屋敷地が形成され、13 世紀末～14 世紀初頭に屋敷地が再度形成される。香西南西打遺跡では 11 世紀後半～12 世紀前半と 13 世紀後半～14 世紀前半の 2 時期の屋敷地の形成が確認される。鬼無藤井遺跡でも同時期の遺構が顕著になることが認められる。

平野西端部の本津川流域は香西氏の本拠地であり、標高 360 m 程の勝賀山山頂には勝賀城が築城されるとともに、独立丘陵上や平地には藤尾城や作山城、佐料城、筑城城跡等の香西氏に関連する城館が築かれた。勝賀城跡は国史跡に指定すること目的に、平成 28 年度から高松市教委による発掘調査と測量調査が実施されている。

香東川と本津川に挟まれた鶴市町、飯田町、檀紙町、御藪町では多数の塚が点在する。これらの塚は分布位置により青木 1～14 号塚や飯田西 1～4・7～37 号塚、紙漉 1～26 号塚等の 8 グループに分けられる。規模は径 1 m 程度の小規模なものから、全長 10～20 m の比較的大形のものまである。外見上の構造は、盛土で構築されるものと礫の集積により構築されるものがある。これらの塚は中世から近世の土器片や古墳時代の埴輪片を出土する場合があるが、遺跡であるか否かの判断も含めて性格が判然としないものがほとんどである。しかし、下位に中世の墓壙がある飯田西 14 号塚や古墳の名残である相作馬塚古墳のような事例も確認される。相作馬塚古墳では未盗掘の竪穴式石室を検出し、多数の副葬品を原位置で確認することができた。同古墳は 14 世紀前葉には大規模な石組区画墓を連結した墓域に変更され、16 世紀に石組区画墓が廃絶されたのちも盛土を行なうなど、塚として整備されて現代まで機能していた。

近世になると、香西南西打遺跡や西打遺跡、鬼無藤井遺跡において溝や掘立柱建物、井戸、耕作地等が確認されている。寛永 14 年 (1637) に東西二股に分かれていた香東川の流路が、西郷八兵衛による河川改修で石清尾山西側を直線的に北流する流路に一本化された。



第2図 周辺の遺跡分布図

## 参考文献

香川県教育委員会 2000『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1編 西行道路』

高松市教育委員会 2000『森松酒造地区西開発開通事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香西南西行道路』

2001『森松酒造地区西開発開通事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 駐無藤井道路』

2015『高松市内道路発掘調査報告書 相作馬塚』

高松市教育委員会・㈱日進空 2017『相作馬塚古墳』

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 確認調査の概要

確認調査では、盛土構造の確認及び遺構の有無、遺構の広がりを確認するため、紙漉5号塚は計6本のトレンチを南北・東西方向に十字に設定した（第3図）。その結果、西側を除くトレンチで塚外側に浅い溝状の遺構が確認され、東側と南側のトレンチにおいて数段積み上げられた砂岩円礫が検出された。塚の本体は石圓区画が巡る構造であることが判明した。盛土中からは中世の土器のみが出土した。

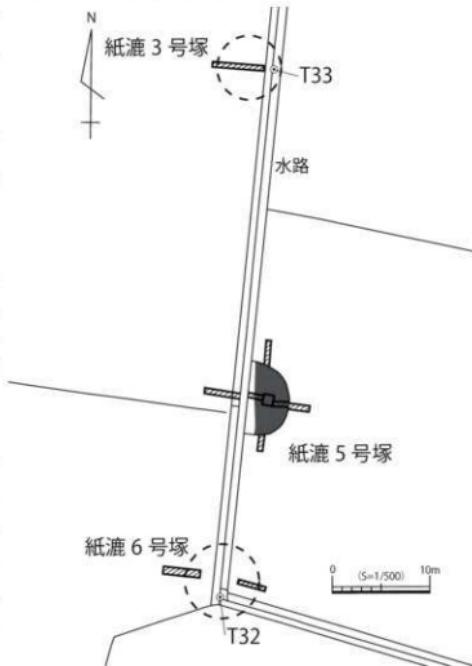
紙漉5号塚と同じ調査対象地にある紙漉3・6号塚は、確認調査に先行する現地踏査で地上に墳丘状の高まりが認められなかった。確認調査では塚の所在地であると考えられる位置にトレンチを入れたが（第3図）、塚に関連するものも含めて遺構は確認されなかった。このため、3・6号塚については確認調査で保護措置を完了し、5号塚については発掘調査を実施することになった。

#### 出土遺物（第4図）

1～4は紙漉5号塚の出土遺物であり、1～3は墳丘頂上にあった祠に納められていた石造物であり、4は確認調査において表土から出土した石造物である。

1は宝篋印塔の基礎であり、石材は天霧産の凝灰岩である。高台上面には非常に僅かな段が1段巡っており、中央に直径約10cm、深さ2cmを測る円形の凹みがある。3面の側面は格狭間である。下面是大きく抉られ、加工痕が明瞭に残る。15世紀前半のものと考えられる。2は五輪塔の風輪であり、石材は豊島石といわれる凝灰岩である。上面に僅かな平坦面がある。3は欠損部が多いが円形を呈し、五輪塔の風輪である可能性が考えられる。石材は凝灰岩の豊島石である。

4は宝篋印塔の相輪である。石材は天霧産の凝灰岩である。相輪の下端部であり、下位から伏鉢、請花、九輪であり、伏鉢の底面に円柱状の突起を有する。請花は摩耗が著しく、文様の掘り込みが浅いが、請花の数は8弁である。



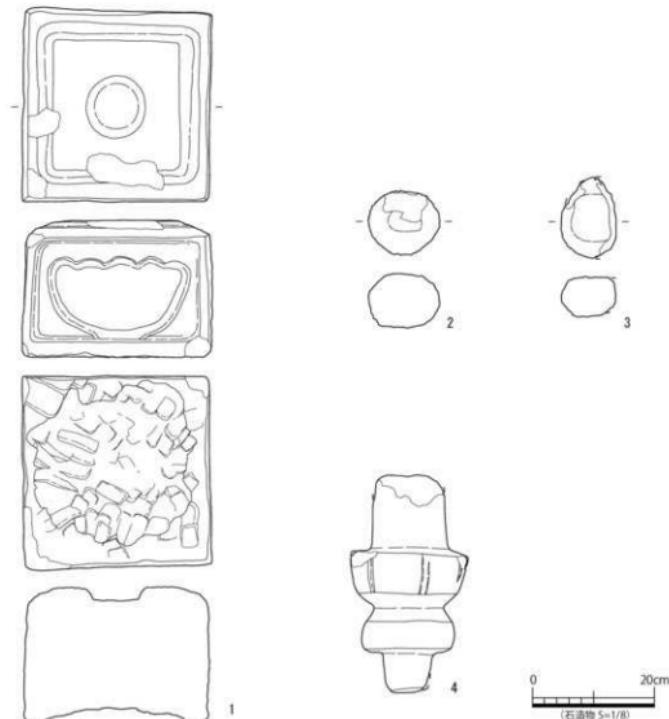
第3図 塚の位置と確認調査トレンチ設置図

## 第2節 調査の方法

確認調査のトレンチの位置を再利用して南北方向と東西方向の十字に断面観察用畔を設定した。調査は畔を基に塚を四分割し、上層から掘り下げていき、検出した遺構を調査した。

遺構の平面図は手測りにより行い、調査地に近在する基準点を用いて国土座標第IV系(世界測地系)にはめ込む方法を取った。基準点の座標は、T 32 (X = 145728.579, Y = 46415.854, H = 17.237)、T 33 (X = 145782.631, Y = 46421.049, H = 16.962)である。土層図・立面図作成時に必要な標高もT 32の標高をもとに算出した。なお、基準点の等級は不明である。

写真撮影に際しては、デジタルカメラでの記録とし、コンパクトカメラとデジタル1眼カメラを用い、主要な写真は紙に印刷したうえで保管するハイブリッド保存の手法を採用した。



遺物番号	出土遺構名	種類	器種	法量(cm/g)				石材	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
1	確認調査	石造物	宝篋印塔(基礎)	31.8	30.7	22.0	34500	凝灰岩(天端)	
2	確認調査	石造物	五輪塔(裏輪)	10.6	11.8	9.0	1000	凝灰岩(腹島)	
3	確認調査	石造物	不明	13.2	(9.1)	6.6	(761)	凝灰岩(腹島)	五輪塔(裏輪)?
4	確認調査	石造物	宝篋印塔(相輪)(九輪・諸花・伏跡)	(35.7)	18.8	-	(7700)	凝灰岩(天端)	

第4図 確認調査出土遺物実測図

### 第3節 調査成果

#### 1. 規模（第5図）

調査前の現況では、平面形は西側を現有のコンクリート水路に掘削され、盛土裾部で半楕円形を呈する。しかし、西側の水田耕作による削平も想定でき、本来の塚は円形であった可能性が考えられる。現況では、南北方向の長径は約7.50m、東西方向の短径は約4.20m、現水田面からの高さは約0.70m強を測る比較的規模の大きな塚である。盛土頂部の標高は17.70mであり、南北に長軸をもつ楕円形を呈する。盛土斜面の等高線はほぼ均等の幅で楕円形に廻る。塚表面には、安山岩や砂岩の円礫、凝灰岩等が散乱する。

#### 2. 盛土の堆積状態（第5図）

塚は全面盛土により構築されており、65層の土層に細分される。その堆積状況から表土である第1・2層、1期石囲区画に伴う第3・28～33・35～37層、2期石囲区画に伴う第4・5～27・38～51・54～63層、塚構築の基盤に関係する第34・52・53・64・65層に大別できる。

塚の構築工程を復元すると、まず地山を平坦に整地し、第34・52・53・64・65層を敷いて平坦面を造り、次に中央部に薄い土層を何層も重なり合わせて版築状の高まりを作り、周辺部に土を入れて、円形の塚が完成したと考えられる。2時期の石囲区画の掘り込み面が検出されてないため、石囲区画の積石と周辺部への盛土は同時に施工されたと想定される。

#### 3. 遺構・遺物

##### 《近世》（第5図）

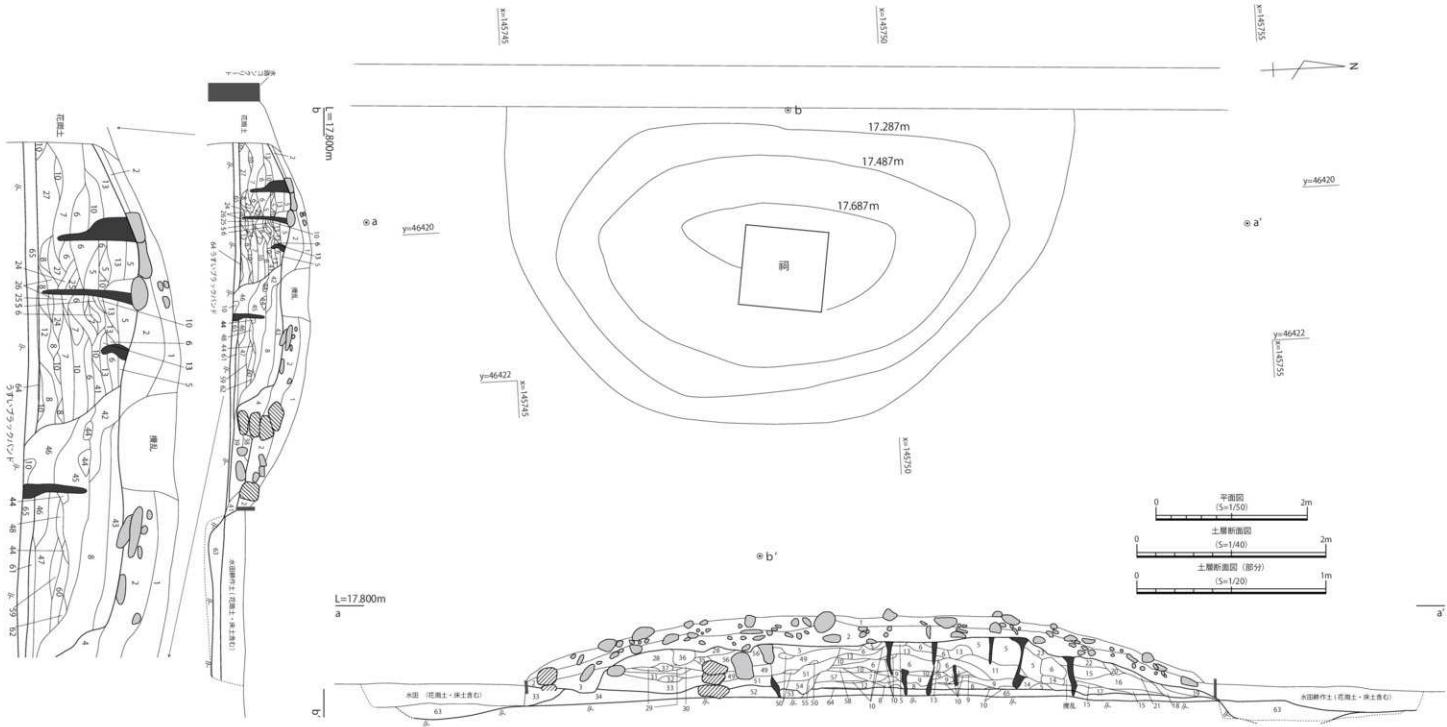
表土である第1・2層を掘削して検出した遺構は1期石囲区画と石組遺構である。堆積土層は第3・28～33・35～37層である。その堆積状況は、第3層が1期石囲区画の南側区画の裏込めであり、第28～33・35～37層は1期石囲区画の盛土であり、黄褐色シルトとぶい黄橙色シルトの組み合わせである。

##### 1期石囲区画（第6～9図）

表土を撤去して検出した遺構であり、塚の東側と南側、西側に位置する石積の区画である。西側区画は検出長2.65m、南側区画は2.20m、東側区画は2.04mを測り、石材は砂岩と安山岩である。表土を撤去した時点で東側区画の内側に後述する2期石囲区画の東側区画を検出した。調査時では同一の区画と認識したために平面図・立面図作成と写真撮影は1期区画として行った。

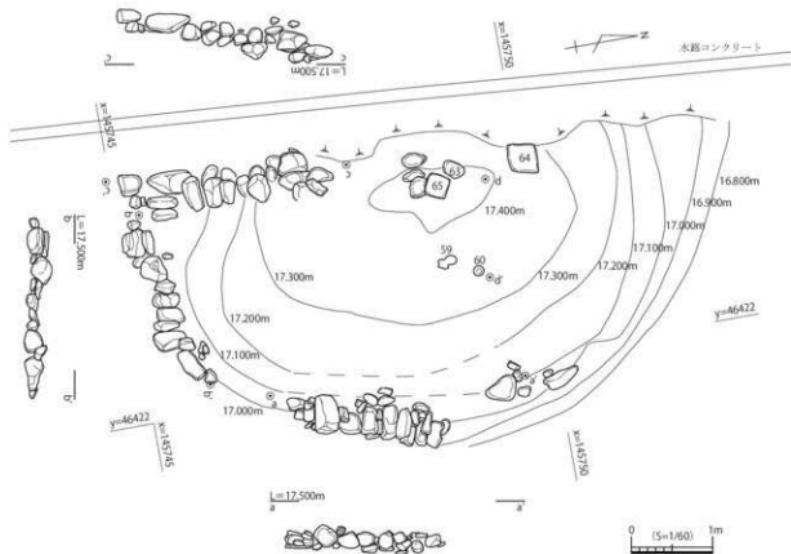
西側区画は塚の南西隅に位置し、方位はN-4°-Eを示す。中央部の石は小口面を外側に向いているが、北端部と南端部は横口面を外側に向けて並べている。石積みは1段から3段であり、最も高い石の上面の標高は17.45mである。石の上面は北から南に向かって下がっており、石の基盤のレベルも同様である。石の抜き取り痕は確認していないことから、石の積み方は本来の姿を保っていると考えられる。

南側区画は塚の南側に位置し、その西端は西側区画南端から約0.50m離れている。方位はN-75°-Eであり、西側区画に対してやや鋭角な角度である。中央部の石は小口面を外側に向いているが、西端部と東端部は横口面を外側に向けて並べている。石積みは1段から2段であり、

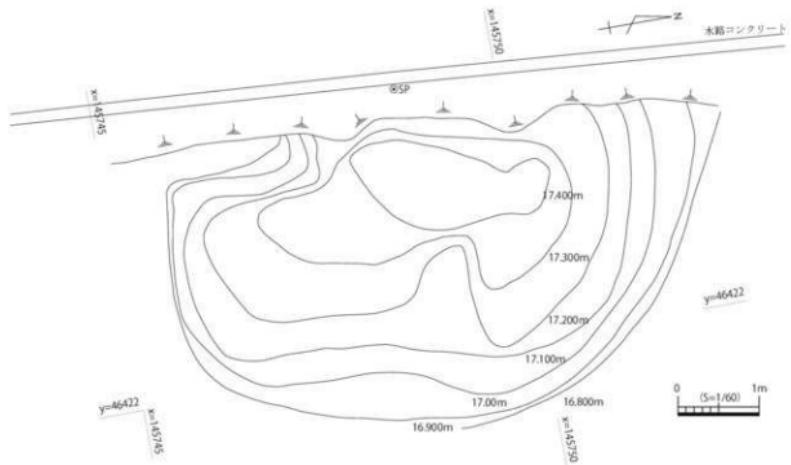


- |                                       |                             |                                  |                             |                                  |                              |
|---------------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|------------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 (黒多量)…表土          | 11 10YR5/6 黄褐色シルト (黄褐色)     | 22 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色 10%混) | 33 10YR6/6 明黄褐色シルト          | 44 10YR6/4 にぶい 黄褐色シルト            | 55 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト        |
| 2 10YR5/2 斜黄褐色シルト質粘土質砂 (混合含)…表土       | 12 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト       | 23 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色 5%混)  | 34 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) | 45 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト            | 56 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト        |
| 3 10YR3/2 黒褐色シルト…石列の前面                | 13 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト       | 24 10YR4/4 暗褐色シルト                | 35 10YR5/5 にぶい 黄褐色シルト       | 46 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色)      | 57 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト        |
| 4 10YR5/4 黄褐色シルト…石列の裏込め<br>(中世の土器片含む) | 14 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト       | 25 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト            | 36 10YR4/4 にぶい 黄褐色シルト       | 47 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色)      | 58 10YR4/6 暗褐色シルト            |
| 5 10YR4/4 暗褐色シルト                      | 15 10YR4/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) | 26 10YR4/4 暗褐色シルト                | 37 10YR6/4 にぶい 黄褐色シルト       | 48 10YR6/4 にぶい 黄褐色シルト            | 59 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト        |
| 6 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色)            | 16 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト       | 27 10YR5/6 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色)      | 38 10YR4/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) | 49 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色 3%混)  | 60 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト        |
| 7 10YR3/3 増厚シルト                       | 17 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) | 28 10YR6/6 にぶい 黄褐色シルト            | 39 10YR7/3 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) | 50 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色 30%混) | 61 10YR6/3 にぶい 黄褐色シルト        |
| 8 10YR3/3 増厚シルト                       | 18 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) | 29 10YR6/6 明黄褐色シルト               | 40 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト       | 51 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色 10%混) | 62 10YR7/6 黄褐色シルト            |
| 9 10YR4/4 暗褐色シルト                      | 19 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) | 30 10YR6/6 にぶい 黄褐色シルト            | 41 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト       | 52 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色 40%混) | 63 2,5YR6/3 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色) |
| 10 10YR4/6 明黄褐色シルト                    | 20 10YR6/6 暗褐色シルト           | 31 10YR5/6 黄褐色シルト                | 42 10YR6/4 にぶい 黄褐色シルト       | 53 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト (黄褐色)      | 64 10YR4/4 暗褐色シルト            |
| 11 10YR6/6 明黄褐色シルト                    | 21 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト       | 32 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト            | 43 10YR6/4 にぶい 黄褐色シルト       | 54 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト            | 65 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト        |

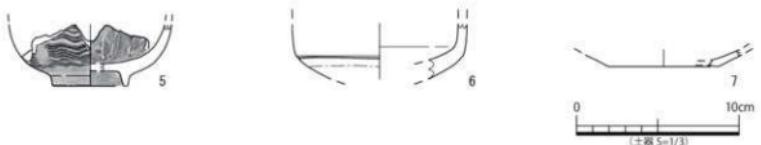
第5図 塚平・断面図



第6図 1期石囲区画平・立面図

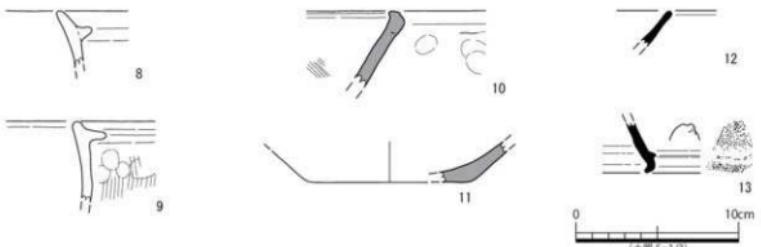


第7図 1期石囲区画撤去後の填丘平面図



遺物番号	出土遺構	種別	器種	産地	法量(cm)			色調1 (胎土・外面 色調)	色調2 (釉薬・内 面色調)	色調3 (真須・上 絵)	調整	備考
					口径	底径	器高					
5	1期石圓 区画	陶器	碗	肥前系	-	(4.6)	[3.8]	細 7.5YR5/2 灰褐	透明	7.5YR8/1 灰白	-	三島手
6	1期石圓 区画	陶器	碗	-	-	-	[3.5]	細 7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/2 灰白	-	外表面：回転ナデ、施釉、 内表面：ヘラケズリ	
7	1期石圓 区画	軟質施釉陶器	土瓶	屋島燒	-	(6.8)	[1.1]	微 5YR7/4 にぶい橙	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	-	外表面：ナデ、回転ヘラ ケズリ 内表面：回転ナデ、施釉

第8図 1期石圓区画盛土出土遺物実測図(1)



遺物番号	出土遺構	種別	器種	産地	法量(cm)			胎土 (色調1)	釉薬 (色調2)	真須 (色調3)	調整	備考
					口径	底径	器高					
8	1期石圓 区画	土師質土器	足釜	-	-	-	(3.5)	粗 7.5YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄褐	-	-	外表面：摩滅 内表面：摩滅 焼成：良 外表面：接合痕あり
9	1期石圓 区画	土師質土器	足釜	-	-	-	(5.0)	普通 7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/6 褐	-	-	外表面：ヨコナデ、 指オサエ後ハケ 内表面：摩滅 焼成：良 鶲部下部に煤付着
10	1期石圓 区画	須恵質土器	程鉢	-	-	-	[4.7]	普通 N5/灰	N8/灰白	-	-	外表面：ヨコナデ、 指オサエ 内表面：ヨコナデ、 ハケ、ナデ 焼成：良
11	1期石圓 区画	須恵質土器	程鉢	-	-	(11.0)	(2.5)	普通 7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	外表面：ナデ 内表面：ナデ 焼成：良 底面：未調査
12	1期石圓 区画	須恵器	杯	-	-	-	(2.2)	普通 N6/灰	N6/灰	-	-	外表面：回転ナデ 内表面：回転ナデ 焼成：良好
13	1期石圓 区画	須恵器	高杯	-	-	-	(3.0)	普通 N6/灰	N6/灰	-	-	外表面：回転ナデ 内表面：回転ナデ 焼成：良 外表面にヘラ記号

第9図 1期石圓区画盛土出土遺物実測図(2)

最も高い石の上面の標高は 17.32 m である。石の基盤はほぼ水平であり、標高は 16.90 m 前後である。

東側区画は塚の東側ほぼ中央に位置し、その南端は南側区画東端から約 0.90 m 離れている。方位は N - 20° - E であり、南側区画に対してやや鈍角の方向にある。石の小口面を外側に向けて並べている。石積みは 1 段から 2 段であり、最も高い石の上面の標高は 17.24 m である。石の基盤はほぼ水平であり、標高は 16.90 m ~ 17.00 m である。

### 出土遺物

5～13は1期石囲区画の盛土より出土した遺物であり、5～7は1期石囲区画の裏込から出土した。

5は肥前系陶器碗で、南側区画の裏込より出土した。高い高台を持ち、内外面の装飾手法は三島手である。6は炻器碗で、東側区画の裏込より出土した。腰部からほぼ垂直に立ち上がる。7は軟質施釉陶器土瓶で、南側区画の裏込より出土した。屋島焼である。

8は土師質土器足釜で、口縁端部の下に鈎が付く。9は南側区画の内側より出土した土師質土器足釜で、口縁端部の直下に長い鈎が付く。体部外面は指オサエ・粗いハケが施される。10は東側区画の内側より出土した須恵質土器捏鉢で、体部から直線的に口縁部に至る。口縁部に接合痕が残る。11は南側区画の内側より出土した須恵質土器捏鉢で、平底であり、内面は滑らかである。

12は南側区画の内側より出土した須恵器杯で、体部から直線的に口縁部に至り、口縁端部は丸い。13は南側区画の内側より出土した須恵器高杯の脚部で、外面にヘラ記号の一部がある。

### 石組遺構（第10～13図）

表土を撤去して検出した遺構であり、板石状に加工した凝灰岩を正方形に組んでいる。塚の頂上や北側に位置する。側石の上面の標高は17.60mである。規模は東西方向0.48m、南北方向0.43m、深さは0.19mを測り、内側の長さは0.35mである。北壁と東壁の凝灰岩は遺存状態が良いが、南壁・西壁は凝灰岩が割れて部分的に残る程度である。埋葬施設の可能性を想定して慎重に調査したが、遺物等は皆無である。内部には表土が流れ込み、数個の安山岩、凝灰岩の礫が検出される。内部に少しの空間があり、何らかの蓋が存在していた可能性が考えられる。東側石を挟む状態で北側石と南側石が設置されている。

石組遺構の周辺には多量の円礫や小石、礫、石造物が検出される。検出した石上面の標高は17.30～17.70mであり、墳丘上面の傾斜と同様に下がっている。これらの石の検出状況は不規則であり、遺構とは考えられない。石材は安山岩、砂岩、凝灰岩である。

### 出土遺物

第11図14～17は石組遺構の側石であり、石材はすべて八栗産の凝灰岩である。14は長方形を呈し、断面は不整な三角形である。1面に方形の加工痕が1方向から明瞭に残る。15は1面のみ残存し、方形の加工痕が残る。16は長方形を呈し、2面が残存する。風化による穴が多数見られる。17は破片であり、本来の形状は不明である。断面は三角形で、上面には方形で大形の加工痕が明瞭に残る。

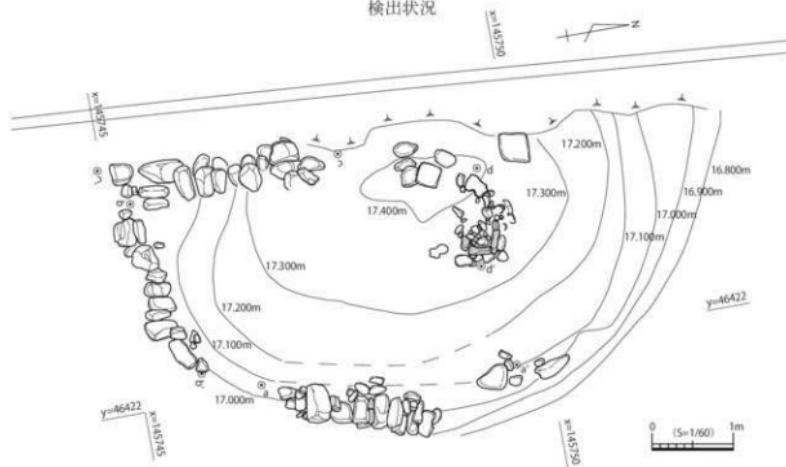
18～31は石組遺構周辺から出土した遺物である。

18は土師質土器鍋で、口縁端部は内彎気味に立ち上がる。内外面にナデによる棱線が明瞭に残る。19は石囲遺構下から出土した土師器壺で、口縁部は外反する。20・21は土師質土器足釜の脚部である。20は体部との接合付近であり、指ナデが明瞭に残る。21は内側に煤が付着する。

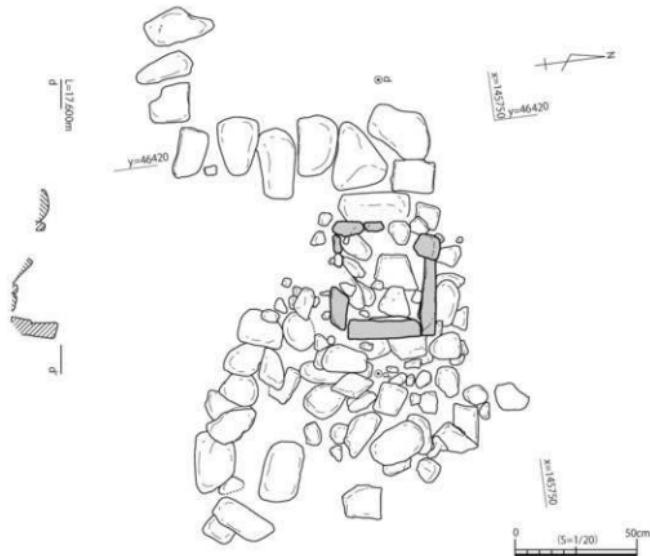
22は骨であるが、小片のため詳細は不明である。

23は五輪塔の空輪である。石材は八栗産の凝灰岩である。遺存状態が悪く全体の3/4強を欠損するが、下面に円柱状の突起の基部が残存する。24は石囲遺構の東側で出土した五輪塔の空風輪で、一石造りである。石材は五夜旗産の凝灰岩である。空輪は宝珠形、風輪は半円形であり、

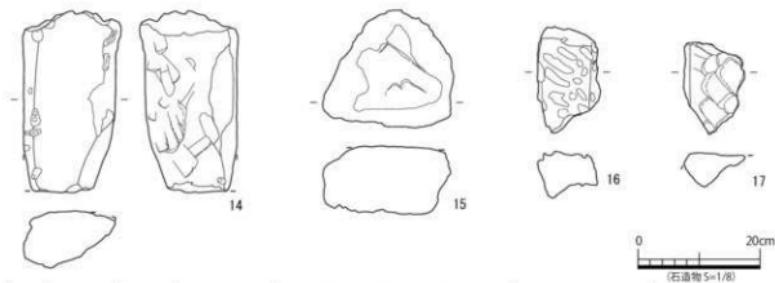
検出状況



完掘状況

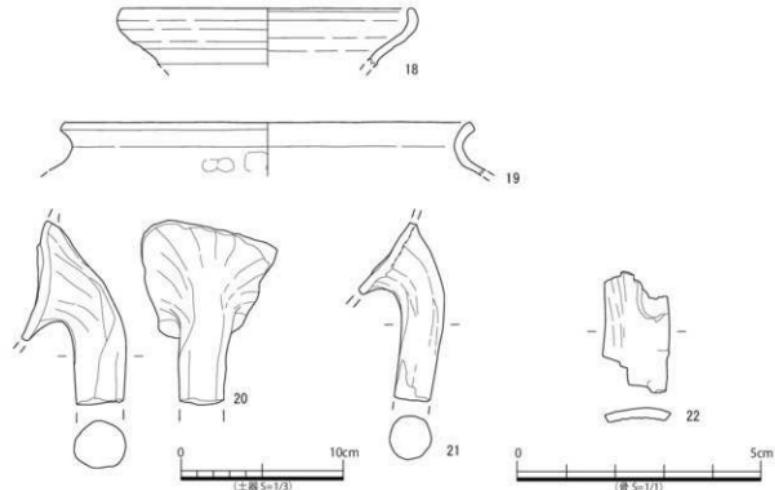


第 10 図 石組造構平・断面図



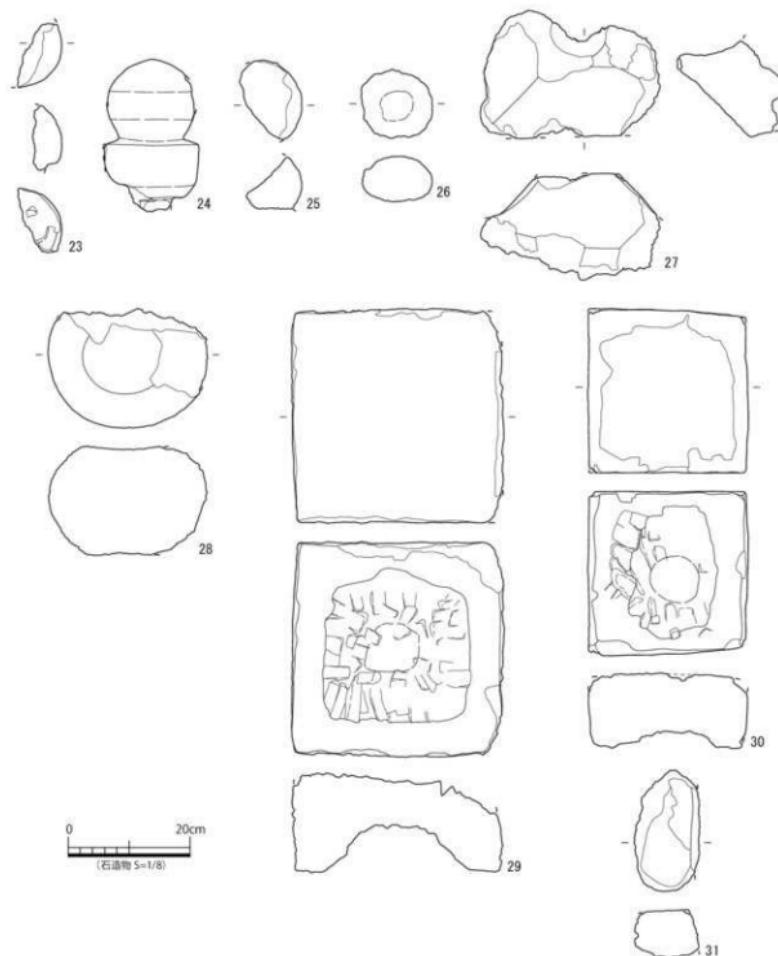
遺物 番号	出土遺構	種類	器種	法量 (cm/g)				石材	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
14	石組造構	石造物	側石	29.7	16.0	9.3	3000	凝灰岩 (八栗)	
15	石組造構	石造物	側石	(19.3)	(21.5)	(11.1)	(3200)	凝灰岩 (八栗)	
16	石組造構	石造物	側石	(17.4)	(10.3)	(7.6)	(799)	凝灰岩 (八栗)	風化による穴多数あり
17	石組造構	石造物	側石	(14.8)	(9.5)	(5.4)	(361)	凝灰岩 (八栗)	

第11図 石組造構側石実測図



遺物 番号	出土遺構	種別	器種	産地	法量 (cm)			胎 土	色調 1 (胎土・外面 色調)	色調 2 (胎土・内 面色調)	色調 3 (内面・ 上経)	調整	備考
					口徑	底径	器高						
18	石組造構周辺	土師質土器	網	-	(17.8)	-	(3.6)	普 通	10YR6/4 に似い黄相	10YR7/3 に似い黄相	-	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ	焼成：良
19	石組造構周辺	土師器	甕	-	(24.8)	-	(3.3)	普 通	7.5YR6/6 相	10YR7/4 に似い黄相	-	外面：ヨコナデ、指觸E、 ナデ、 内面：摩滅	焼成：良
20	石組造構周辺	土師質土器	足釜	-	底 (11.3)	底 3.2	-	普 通	7.5YR6/6 相	7.5YR7/4 に似い黄相	-	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：良
21	石組造構周辺	土師質土器	足釜	-	底 (10.8)	底 2.5	-	普 通	10YR6/4 に似い黄相	10YR7/4 に似い黄相	-	外面：ナデ 内面：ナデ、指触サエ 燐付着 接合面残存	焼成：良
22	石組造構周辺	骨	-	-	底 [2.5]	相 1.3	厚 [0.2]	-	-	-	-	-	-

第12図 石組造構周辺出土遺物実測図（1）



遺物 番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm/g)				石材	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
23	石組遺構周辺	石造物	五輪塔（空輪）	[9.2]	[6.2]	[10.6]	[433]	凝灰岩（八葉）	
24	石組遺構周辺	石造物	五輪塔（空里輪）	[24.8]	15.4	-	[3950]	凝灰岩（五夜纈）	
25	石組遺構周辺	石造物	五輪塔（空風輪）	(12.2)	9.1	-	[506]	凝灰岩（八葉）	
26	石組遺構周辺	石造物	不明	11.3	11.5	7.4	909	凝灰岩（豊鳥）	五輪塔（空輪）？
27	石組遺構周辺	石造物	五輪塔（火輪）	[20.5]	[29.4]	[17.1]	[5200]	凝灰岩（五夜纈）	
28	石組遺構周辺	石造物	五輪塔（水輪）	-	26.2	17.9	[7400]	凝灰岩（五夜纈）	
29	石組遺構周辺	石造物	五輪塔（地輪）	35.3	34.9	[16.1]	[18500]	凝灰岩（五夜纈）	
30	石組遺構周辺	石造物	五輪塔（地輪）	26.9	26.1	12.4	9600	凝灰岩（五夜纈）	上面は風化が著しい
31	石組遺構周辺	石造物	不明	[19.8]	[10.8]	[7.9]	[1800]	凝灰岩（火山）	

第 13 図 石組遺構周辺出土遺物実測図 (2)

下面に円柱状の突起を有する。25は五輪塔の一石造りの空風輪であり、遺存状態が悪いが空輪部分である。石材は八栗産の凝灰岩である。26は石圓遺構の南東隅に接して出土した石造物で、遺存状態が非常に悪いが、円形の形状から五輪塔の空輪と想定される。石材は豊島産の凝灰岩である。27は石圓遺構西側で出土した五輪塔の火輪である。石材は五夜嶽産の凝灰岩である。遺存状態が悪く全体の1/2強を欠損する。上面に深い抉りがある。29の地輪とセット関係であると考えられる。28は石圓遺構の南西側で出土した五輪塔の水輪であり、全体の1/3を欠損する。石材は五夜嶽産の凝灰岩である。上・下面が僅かに凹む。29は石圓遺構の北西側で出土した五輪塔の地輪である。石材は五夜嶽産の凝灰岩である。一辺35cmの方形を呈する。上面は全面削れしており、原形を保っていない。下面是広く深く抉られており、方形の加工痕が放射状に明瞭に残る。27の火輪とセット関係である可能性が考えられる。30は石圓遺構の南西側で出土した五輪塔の地輪である。石材は五夜嶽産の凝灰岩である。一辺27cmの方形を呈し、厚さは12.4cmで、やや薄い感じの地輪である。上面は風化が著しく、特に周辺部の剥離が激しい。下面是大きく凹み、方形の加工痕が明瞭に残る。31は石圓遺構周辺で出土した器種不明の石造物である。石材は火山産の凝灰岩である。遺存状態が悪く、上面と側面の一部が残存する。

#### 『中世』(第5図)

近世と考えられる盛土を掘削して検出した遺構は2期石圓区画である。その盛土の堆積状況は、第4層が2期石圓区画の東側区画の内側にあり、裏込である。第5～27・38～51・54～63層は2期石圓区画の盛土であり、褐～にぶい黄褐色・にぶい黄橙色の組み合わせである。東西方向の土層図を見ると、西側と東側で異なる堆積状態を呈する。西側は薄い土層が何層も重なり合った版築状になっているのに対し、東側は厚い層の堆積であり、塚中央から傾斜して下がる盛土の「目地」を確認することができる。南北方向の土層図でも堆積の様相が全く異なっている。南側は東側と同様に厚い層の堆積であり、中央付近から傾斜して下がる盛土の「目地」を確認することができる。中央部は版築状の堆積を呈するが、北側は厚い層の堆積であり、北方に傾斜して下がる盛土の「目地」を確認することができる。土層図から推測できる盛土の構築は、塚中央部が版築状であり、周辺部は傾斜して下がる厚い層の堆積であると考えられる。

#### 2期石圓区画(第14～16図)

2期石圓区画は、1期石圓遺構の内側の盛土を掘削して確認した。石圓区画は塚の東側と南側に検出し、平面形は「L」字形を呈する。検出長は東側が約3.20m、南側が約2.75mを測る。東側の区画は東に面を持ち、南側の区画は南に面を持つ。東面と南面はほぼ直角に屈曲し、その接点において1石が欠損する部分が認められる。石材の抜き取り痕は確認していない。石材は砂岩と安山岩の円礫である。東側区画の位置は1期石圓区画より約0.70m内側にあり、南側区画は1期石圓区画より約1.50m以上内側で検出する。前述したように、調査時に1期石圓区画の東側区画と2期の東側区画を同時に検出し、平面図・立面図の作成と写真撮影を行ったために立面図の一部に空白部分がある。東側区画の北西側に9個の石が同レベルで集中して検出されるが、その配置が不規則であるため石圓区画と関連するとは考えられない。

南側区画は塚の南側に位置し、方位はN-85°-Wを示す。石積の技法は、石の小口面を外側に向けて並べている。石積は1段から3段であり、最も高い石の上面の標高は17.37mで

ある。石の基盤はほぼ水平であり、標高は 16.88 m 前後である。

東側区画は塚の東側中央に位置し、方位は N - 6° - E を示す。石積の技法は、石の小口面を外側に向けて揃えて並べているが、南端部と北端部の 1 石は横口面を外側に向いている。石積は 3 段から 5 段であり、最も高い石の上面の標高は 17.50 m である。石の基盤はほぼ水平であり、標高は 16.95 m 前後である。

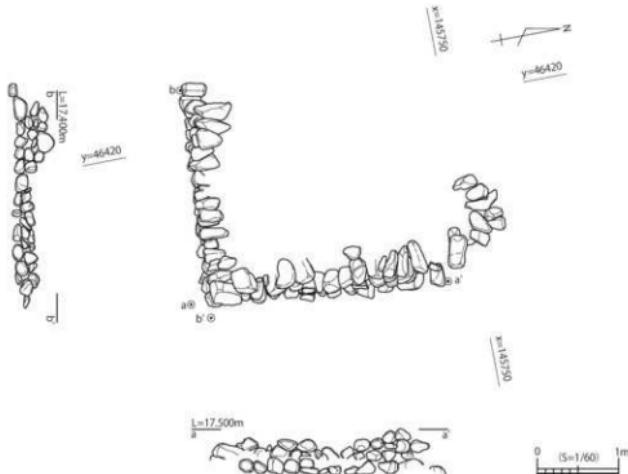
#### 出土遺物

32 ~ 42 は 2 期石圓区画の盛土から出土した遺物であり、32・33 は 2 期石圓区画の裏込から出土した。

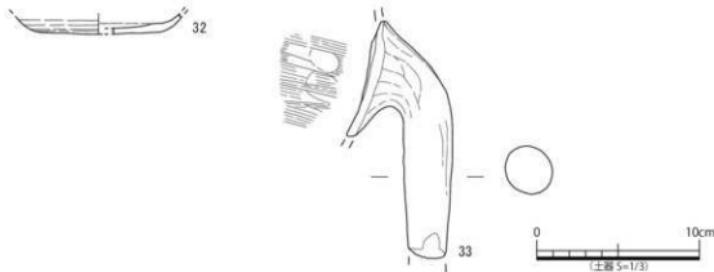
32 は土師器杯で、東側区画の裏込より出土する。平底の底部から緩やかに立ち上がる。底部の調整は回転ヘラ切り後にナデが施される。33 は土師質土器足釜の脚部で、東側区画の裏込より出土する。内曲面に煤が付着し、体部内面は指オサエ後にハケが施される。

34・35 は土師器杯で、直線的に口縁部に至る。36 は土師器蓋である。37 は土師器蓋で、口縁部は緩やかに外反する。38 は 2 期石圓区画の南側区画の内側より出土した土師質土器足釜の脚部で、体部との接合部分を欠損する。先端は細く丸くなっている。39 は須恵質土器底部で、内外面ともに摩滅・剥離が著しいが、外面に工具の圧痕が残る。

40 は須恵器杯の蓋で、口縁部はほぼ直立し、端部は内部に段を有する。41 は南側区画の内側より出土した須恵器高环の脚部で、円孔 1 個が残存する。42 は南側区画の内側より出土した須

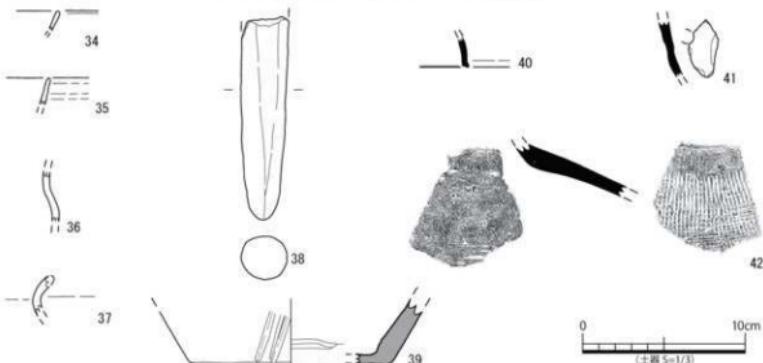


第 14 図 2 期石圓区画平・立面図



遺物番号	出土遺構	種別	器種	产地	法量(cm)			胎土	色調1 (胎土・外側 色調)	色調2 (胎土・内側 色調)	色調3 (内側・ 上絵)	調整	備考
					口径	底径	器高						
32	2期石圓区画	土師器	杯	-	-	7.8	[1.3]	普通	7.5YR6/6 相	10YR7/4 にぶい黄褐	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良 底面：回転ヘラ切り後ナデ
33	2期石圓区画	土師器 土器	足釜	-	長さ [14.4]	径 [2.8]	-	普通	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR7/4 にぶい橙	-	外面：ナデ 内面：指オサエ、ハケ	焼成：良 焼付着

第15図 2期石圓区画盛土出土遺物実測図(1)



遺物番号	出土遺構	種別	器種	产地	法量(cm)			胎土	色調1 (胎土・外 側色調)	色調2 (胎土・内 側色調)	色調3 (内側・ 上絵)	調整	備考
					口径	底径	器高						
34	2期石圓区画	上飾器	杯	-	-	-	[1.2]	普通	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良
35	2期石圓区画	上飾器	杯	-	-	-	[1.7]	普通	7.5YR8/3 浅黄褐	7.5YR8/3 浅黄褐	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良
36	2期石圓区画	上飾器	点	-	-	-	[3.1]	普通	5YR6/6 相	7.5YR7/6 相	-	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	焼成：良
37	2期石圓区画	上飾器	貫	-	-	-	[2.5]	粗	7.5YR6/6 相	7.5YR7/6 相	-	外面：ヨコナデ、剥離 内面：摩滅	焼成：良
38	2期石圓区画	上飾貫上槽	足釜	当生 [12.0]	相	2.9	-	普通	7.5YR5/6 明陶	-	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：良	
39	2期石圓区画	頭惠貫上器	底部	-	-	[11.0]	[4.1]	普通	2.5Y7/2 灰黄	N6/灰	-	外面：剥離、摩滅 内面：ナデ、ヘラナデ、摩滅 外側に工具の印痕あり	焼成：良
40	2期石圓区画	頭惠器	杯道	-	-	-	[1.8]	普通	N7/灰白	N6/灰	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良
41	2期石圓区画	頭惠器	高杯	-	-	-	[3.4]	普通	N7/灰白	N6/灰	-	外面：回転ナデ、カキ目 内面：回転ナデ、鉋孔あり	焼成：良好
42	2期石圓区画	頭惠器	貫	-	-	-	[3.2]	普通	N7/灰白	N6/灰	-	外面：回転ナデ、カキ目、平行タタキ 内面：ナデ、ヘラナデ、青海波状タタキ 接合痕あり	焼成：良好

第16図 2期石圓区画盛土出土遺物実測図(2)

患器甕の肩部破片である。外面は平行タタキ後のカキ目、内面はナデ・ヘラナデ・青海波状タタキが施される。

#### 地山上層（第 5・17 図）

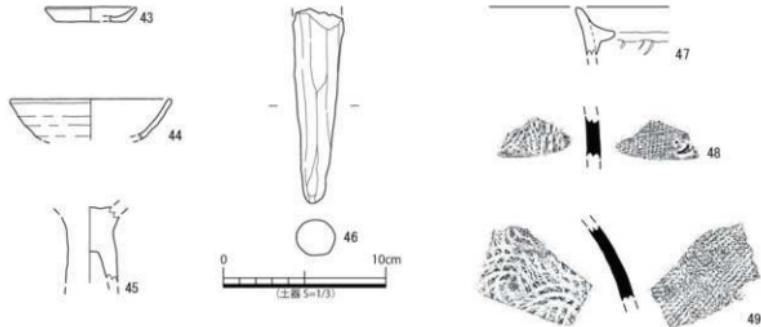
第 34・52・53・64・65 層は構築の基盤となる層である。第 64 層は非常に薄いが、地山面の植生に対する火入れによって生成され、構築開始時に最も地表に露出していたブラックバンド起源の土であり、整地に伴う土層と想定される。第 34・52・53・65 層は地山と近似するにぶい黄褐色シルトで、地山直上に約 8 cm の厚さで水平に堆積する。

#### 出土遺物

43～46 は塚直下の地山上層から出土し、47～49 は塚周囲の地山上層から出土した。

43 は土師質土器小皿で、体部は短い。底面は回転ヘラ切りである。44 は土師器杯で、外面に回転ナデの稜が明瞭にみえる。45 は土師器高杯で、内外面ともに摩滅する。

46 は土師質土器足釜の脚部で、体部との接合部分を欠損する。先端は細く丸くなっている。47 は土師質土器足釜で、口縁部の下にやや長い鈎を持つ。外面に爪圧痕が残る。48 は須恵器で、体部の小片である。外面は格子状タタキ、内面は青海波状タタキが施される。49 は須恵器で、体部上位の小片である。外面は格子状タタキ後にカキ目、内面は青海波状タタキが施される。



遺物 番号	出土遺構	種別	器種	产地	法量 (cm)			胎土	色調 1 (胎土・外面 色調)	色調 2 (釉薬・内 面色調)	色調 3 (須渦・ 上絞)	調整	備考
					口径	底径	器高						
43	地山上層	土師質土器	小皿	-	(5.6)	(4.4)	0.8	普通	10YR8/4 浅黄褐	10YR8/4 浅黄褐	-	外面：回転ナデ、回転ヘラ 切り 内面：回転ナデ	焼成：良
44	地山上層	土師器	杯	-	(9.8)	-	(2.5)	普通	10YR7/3 にぶい黄 褐	10YR8/2 灰白	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良
45	地山上層	土師器	高杯	-	-	-	(4.6)	普通	7.5YR6/6 相 相	7.5YR7/6 相	-	外面：ナデ、摩滅 内面：ナデ	焼成：良
46	地山上層	土師質土器	足釜	-	長さ (12.0)	径 3.1	-	普通	10YR5/2 灰黄褐	-	-	外面：ナデ 内面：-	焼成：良
47	地山上層	土師質土器	足釜	-	-	-	(2.9)	普通	7.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	-	外面：摩滅、指オサエ 内面：ナデ	焼成：良
48	地山上層	須恵器	甕	-	-	-	(2.4)	普通	5R6/1 赤 灰	N7/ 灰白	-	外面：格子状タタキ 内面：青海波状タタキ	焼成：良 外面に黒い付着 物あり
49	地山上層	須恵器	甕	-	-	-	(6.5)	普通	10YR7/8 黄褐	N8/ 灰白	-	外面：平行タタキ、力目 内面：青海波状タタキ	焼成：良

第 17 図 地山上層出土遺物実測図

## 《中世以前》（第5図）

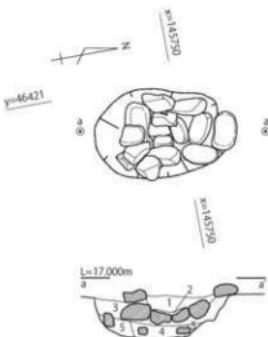
盛土最下層である第34・52・53・64・65層直下の基盤層は黄灰シルトの地山であり、塚中心部は平坦であるが、周縁は緩やかに下がっている。中心部の標高は16.8m前後であり、周囲の地山と比較して約0.16m高くなっている。

地山上面で検出した遺構は、石圓土坑のみである。確認調査においては西側を除くトレーニングで浅い溝状の遺構を検出したが、今回の調査では塚の周辺に若干の落込みは確認できたが、明確な溝としての遺構は検出できなかった。

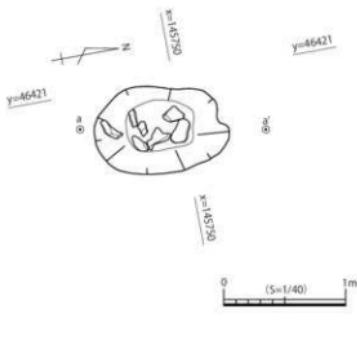
## 石圓土坑（第18図）

盛土直下の地山上面において検出した土坑であり、塚の北東部に位置する。検出した標高は16.83mである。土坑の平面形は楕円形であり、南北方向の長径1.10m、東西の短径は0.72mを測り、最終的な深さは0.35mである。土坑上面において6個の砂岩円礫が楕円形に配置されているのが検出されたため、墓壙の可能性を想定して慎重に掘削した。楕円形に配された円礫の内側に堆積する第1・2層を撤去すると、砂岩円礫が底面を形成するように検出された（第18図左）。円礫の検出範囲は長径1.00m、短径0.71mを測り、円礫上面までの深さは0.15mである。遺物の出土はない。第1層は灰黄褐シルト質極細砂と灰白シルト質極細砂と黄橙シルトであり、厚く堆積する。第2層は灰黄褐シルト質極細砂と灰白シルト質極細砂で、円礫直上に薄く堆積する。円礫下層の第3層と土坑底面に堆積する第4・5層は地山に近似する土であり、第3層は灰白シルトと黄橙シルト、第4層は褐灰シルトと灰黄褐シルト、第5層は灰黄褐シルトである。底面直上には数個の礫が散在する。遺物の出土がないため詳細な時期は不明であるが、検出面が地山であることから塚が形成される以前の遺構と考えられる。

石圓検出状況



土坑完掘状況



- 1 10YR6/2+8/2+8/6 灰黄褐+灰白シルト質極細砂・黄橙シルト
- 2 10YR6/2+8/2 (灰黄褐+灰白シルト質極細砂)
- 3 10YR8/2+8/2 灰白+黄橙シルト
- 4 10YR4/1+5/2 極灰+灰黄褐シルト (粘性強い)
- 5 10YR6/2 灰黄褐シルト

第18図 石圓土坑平・断面図

## 《表土》(第5・19・20図)

第1・2層は塚の表面を覆う表土であり、第1層は粘性が全くない。第1層は厚さ5~16cm、第2層は7~27cmを測る。古墳時代中期の須恵器から近代の陶磁器までの土器が出土し、礫や小石が多量に含まれる。第2層は1期石圓区画と2期石圓区画の最上位の石にかかっているが、下位の盛土と堆積状況が異なるため表土とする。

## 出土遺物

50~84は表土から出土した遺物であり、50~58は第1層出土、59~61は第2層出土、62~84は出土層の特定できない遺物である。

50は肥前系磁器碗で、口縁部は僅かに外反する。口縁部内面と外面の装飾は型紙摺であり、明治以降に比定される。51は肥前系陶器碗で、高い高台が付く。内外面に貫入がある。52は肥前系磁器皿で、断面方形の高台が付く。内面の染付は遠山文である。53は肥前系磁器皿で、残存部はほぼ平坦である。内面の染付は草花文であり、体部外面下位に1本、高台に3本、高台内に1本の團線が巡る。

54は土師質土器壺で、底径16.8cmの底部から緩やかな傾斜で体部が立ち上がる。55は土師質土器足釜で、口縁部やや下に鈎が付く。体部外面に指オサエ、口縁部内面に粗いハケが施される。56~58は土師質土器足釜の脚部である。

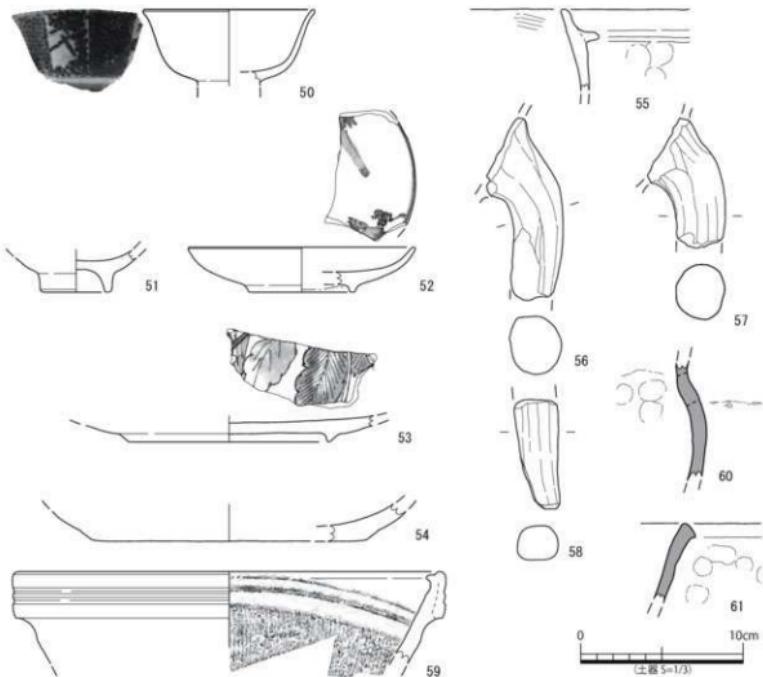
59は明石系陶器擂鉢で、口縁部外面に2本の浅い沈線を巡らせ、内面は拡張する。鉢目は内面全域に見られる。60は須恵質土器壺で、内外面に接合痕が残る。61は須恵質土器捏鉢で、体部から直線的に口縁部に至る。外面に指オサエが施される。

62は肥前系磁器碗で、低い高台が付く。外面に草花文が描かれる。63は肥前系磁器碗で、口縁端部は僅かに外反する。64は肥前系磁器香炉で、口縁端部は僅かに肥厚する。外面は草花文が描かれる。65は陶器花瓶で、体部外面は施釉され、貫入が見られる。底部内面の一部に釉がかかる。66は陶器鉢で、削り出し高台である。体部内面の装飾は刷毛目であり、外面は非常に浅い連弁文をもつ。

67は土師質土器足釜で、口縁部下に短い鈎が付く。体部外面に煤が付着する。68は土師質土器足釜で、外面に短い鈎が付き、鈎部基部に爪痕が残存する。外面に粗いハケが施される。69・70は土師質土器足釜の脚部である。71は土師質土器羽釜で、口縁部は内傾する。外耳である。72は土師質土器焰烙で、外面に煤が付着する。73は土師質土器鍋で、口縁端部は短く直立する。74は土師質土器鍋で、口縁部は内彎し、断面方形である。外面に指オサエが施される。75は土師質土器火消し壺の蓋で、底面は粗いハケが施される。底部に1個の孔が残存する。76は土師質土器甕で、口縁端部に接合面が残る。77は須恵質土器灯明受皿の脚部であり、台内抉り込みの立鼓形である。

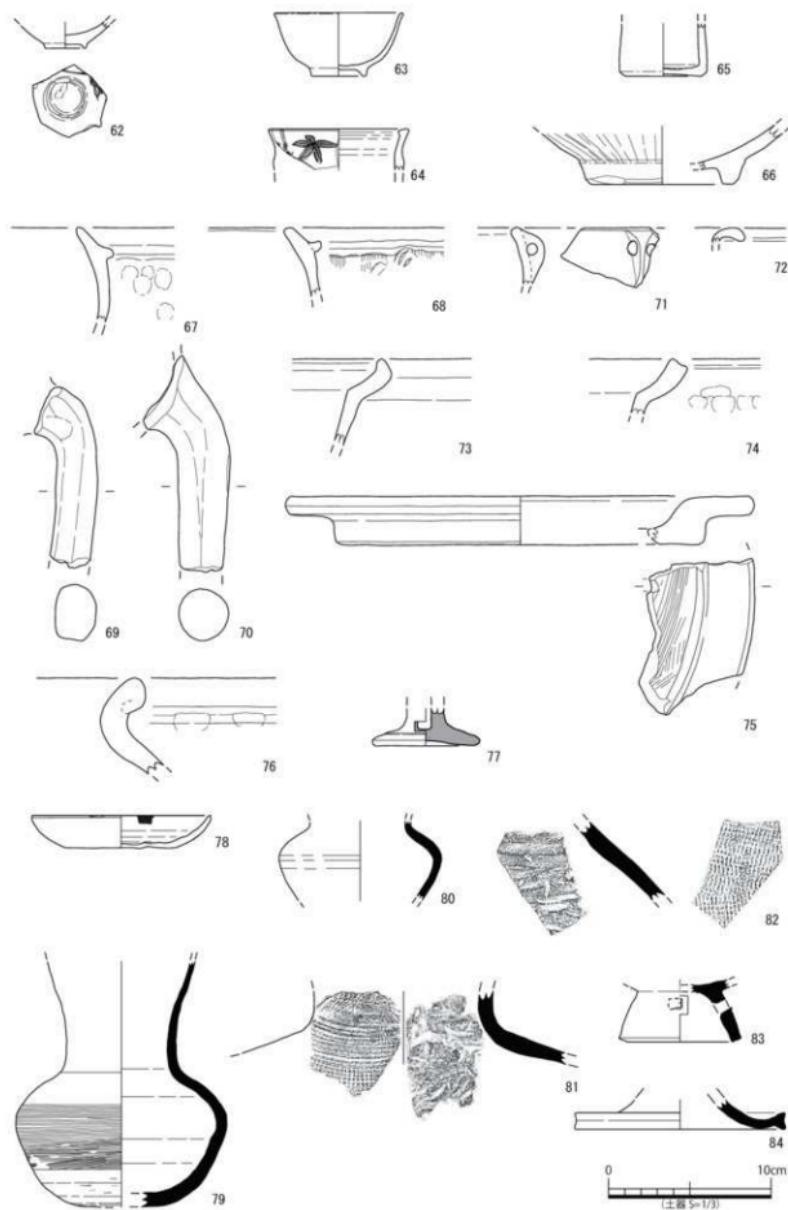
78は土師器灯明皿で、口縁部内面の一部に煤が付着する。底部は回転ヘラ切り後にナデを施す。

79は須恵器壺で、体部中央やや上位が張る器形である。体部外面中央はカキ目、下半は回転ヘラケズリが施される。古墳時代中期中葉に比定される。80は須恵器壺で、体部中央やや上位が張る器形である。外面の一部に自然釉がかかる。古墳時代中期中葉に比定される。81は須恵器壺で、外面に平行タタキ後にカキ目、内面に青海波状タタキが施される。82は須恵器甕の肩部で、外面に格子状タタキ、内面に回転ナデと青海波状タタキを施す。83は須恵器高环で、方



遺物 番号	出土 遺構	種別	器種	度地	法量(cm)			釉土 (釉土・外表面 色調)	色調1 (釉土・内面 色調)	色調2 (釉土・内面 色調)	色調3 (真底・上 絞)	調整	備考
					口径	底径	高さ						
50	表土	磁器	碗	肥前系	(10.6)	-	(4.7)	細 白	2.5YR1/1 透明	透 明	透 明	透 明	型紙染め
51	表土	陶器	碗	肥前系	-	(4.2)	(2.6)	普通 にぶい黄粉	10YR7/3 透 明	透 明	—	透 明	内外面に質 入あり
52	表土	磁器	皿	肥前系	(13.8)	(6.6)	2.8	普通 N8/灰白	透 明	淡 青	透 明	透 明	透 明
53	表土	磁器	皿	肥前系	-	(12.4)	(1.6)	細 N8/灰白	透 明	暗 青	透 明	透 明	透 明
54	表土	土師質土器	甕	-	-	(16.8)	(2.3)	普通 にぶい粉	7.5YR5/4 にぶい粉	7.5YR5/4/4 にぶい粉	—	外 面：摩 滅 内 面：摩 滅	燒成：良
55	表土	土師質土器	足釜	-	-	-	(5.0)	普通 にぶい黄粉	10YR6/4 にぶい粉	7.5YR6/4 にぶい粉	—	外 面：指 サエ 内 面：摩 滅、ハ ケ、ナ デ	燒成：良
56	表土	土師質土器	足釜	-	長さ (11.2)	径 4.6	-	普通 にぶい赤褐色	GYR5/4 にぶい赤褐色	—	外 面：ナ デ 内 面：ナ デ	燒成：良	
57	表土	土師質土器	足釜	-	長さ (8.0)	径 4.8	-	普通 にぶい粉	7.5YR5/3 にぶい粉	—	外 面：ナ デ 内 面：ナ デ	燒成：良	
58	表土	土師質土器	足釜	-	長さ (6.8)	径 2.7	-	普通 にぶい粉	7.5YR5/3 にぶい粉	—	外 面：ナ デ 内 面：—	燒成：良	
59	表土	陶器	擂鉢	明石系	(26.0)	-	(4.6)	普通 赤褐色	2.5YR4/6 赤褐色	—	外 面：回 転ナ デ 内 面：回 転ナ デ	断面：接合 痕あり	
60	表土	須恵質土器	甕	-	-	-	(7.3)	普通 N4/灰	N4/灰	N4/灰	外 面：ナ デ、摩 滅 内 面：ナ デ、指 サエ	燒成：良 接合痕あり	
61	表土	須恵質土器	程鉢	-	-	-	(4.9)	普通 灰	2.5Y5/1 灰	10YR6/3 にぶい黄粉	—	外 面：ヨ コナ デ、指 サエ 内 面：ヨ コナ デ、ナ デ	燒成：良

第19図 表土出土遺物実測図(1)



第 20 図 表土出土遺物実測図 (2)

遺物 番号	出土 遺構	種別	器種	産地	法量 (cm)			色調 1 (地土・外表面 色調)	色調 2 (釉薬・内面 色調)	色調 3 (裏側・ 上端)	調整	備考	
					口径	底径	高さ						
62	表土	磁器	碗	肥前系	-	2.4	[1.6]	細	5Y8/1 灰白	透明	淡青	外面：施釉、草花文 内面：施釉	削り出し高台
63	表土	磁器	碗	肥前系	(7.7)	(3.4)	3.9	粗	N8/灰白	透明	-	外面：回転ナデ、施釉 内面：回転ナデ、施釉	
64	表土	磁器	香炉	肥前系	(8.6)	-	(2.5)	粗	5Y8/1 灰白	透明	暗青	外面：回転ナデ、施釉、草花文 内面：回転ナデ、施釉	
65	表土	陶器	花瓶	-	-	(5.4)	(3.3)	細	10YR8/3 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	-	外面：回転ナデ、ケズリ、施釉 内面：回転ナデ、無施釉	外面：買人あり 此部内面の一部に釉がかかる
66	表土	陶器	鉢	不明	-	(8.6)	(3.6)	細	7.5YR5/1 褐灰	5Y4/3 暗オリーブ	-	外面：透井、施釉、ケズリ出し高台、露胎 内面：施釉、(ハケメ)	
67	表土	土師質土器	足釜	-	(28.0)	-	(5.8)	普通	10YR8/4 にぶい黄橙	10YR8/4 にぶい黄橙	-	外面：ヨコナデ、指オサエ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	焼成：良 外面部の下体部全体に灰化物、焼付着
68	表土	土師質土器	足釜	-	(30.0)	-	(4.3)	普通	7.5YR8/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	-	外面：ナデ、ハケ、ヘラナデ 内面：ナデ	焼成：良 焼合痕あり
69	表土	土師質土器	足釜	-	長さ [11.2]	様	-	普通	7.5YR8/4 にぶい褐	-	-	外面：指屈痕、ナデ 内面：-	焼成：良好
70	表土	土師質土器	足釜	-	長さ [13.3]	様	-	普通	5YR8/6相	-	-	外面：指屈痕、ナデ 内面：-	焼成：良好
71	表土	土師質土器	羽釜	-	(26.0)	-	(3.7)	普通	10YR8/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	-	外面：摩滅 内面：摩滅	焼成：良
72	表土	土師質土器	焜燒	-	(44.6)	-	(0.9)	普通	7.5YR8/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい相	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良 焼付着
73	表土	土師質土器	鍋	-	(46.4)	-	(5.3)	普通	5YR8/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	-	外面：ナデ 内面：ナデ	焼成：良
74	表土	土師質土器	鍋	-	(41.0)	-	(3.4)	普通	5YR8/4 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	-	外面：ヨコナデ、ナデ、指オサエ 内面：ナデ	焼成：良
75	表土	土師質土器	火消壺	-	(28.2)	(22.4)	3.0	普通	SYRA/4赤褐	SYRA/4赤褐	-	外面：ヨコナデ、ナデ、ナデ のちケグ目 内面：ヨコナデ	焼成：良 穿孔一穴（欠損）あり
76	表土	土師質土器	甕	-	(32.0)	-	[5.9]	普通	7.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	-	外面：ナデ、指屈痕 内面：ナデ	焼成：良
77	表土	須恵質土器	灯明受皿	-	-	6.6	(2.3)	普通	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	-	外面：ナデ、沈線 内面：ナデ	焼成：良 容器付き立製形（台内抜き込み）
78	表土	土師器	灯明皿	-	(11.0)	(6.6)	2.0	普通	7.5YR6/6相	7.5YR6/4 にぶい相	-	外面：回転ナデ。回転ヘラ切りナデ 内面：回転ナデ	焼成：良 口縁部一部に焼付着
79	表土	須恵器	壺	-	-	-	(15.1)	普通	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	-	外面：回転ナデ。回転カキ目。 回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	焼成：良
80	表土	須恵器	壺	-	-	-	[4.9]	普通	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良 外面部の削離部分に自然釉が部分的に残存
81	表土	須恵器	壺	-	-	-	[4.5]	精良	N6/灰	N6/灰	-	外面：平行タタキ。回転ナデ。 平行タタキ後に回転カキ目 内面：回転ナデ。青海波状タタキ	焼成：良好
82	表土	須恵器	甕	-	-	-	[4.8]	普通	N6/灰	N7/灰白	-	外面：格子状タタキ 内面：回転ナデ。青海波状タタキ	焼成：良
83	表土	須恵器	高杯	-	-	(6.4)	(3.8)	普通	5Y6/1灰	N6/灰	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良 方形の透かし
84	表土	須恵器	高杯	-	-	(13.0)	(1.8)	普通	N6/灰	N5/灰	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良

形の透かしを有する。脚裾部は方形である。古墳時代後期初頭～中葉の土器である。84は須恵器高杯で、脚裾部は大きく外に広がり、端部は上下に拡張する。古代の土器である。

## 第4章　まとめ

### 第1節　塚の構造と年代

塚の構造は近世の1期石囲区画・石組遺構と中世の2期石囲区画と盛土から構成される。1期石囲区画は南側と東側と西側のコ字形に検出された。石材は砂岩円礫であり、1～3段積みである。石の小口を面となしている。盛土頂上には凝灰岩の石囲遺構が検出され、周囲には凝灰岩製の石造物が多数散在する。石組遺構は埋葬施設の可能性も考えられるが、出土遺物はなく、その性格は不明である。2期石囲区画は1期石囲区画の内側に位置し、南側と東側のL字形を呈する。石材や構造は1期と同様である。

盛土の堆積は、塚の最下層、2期石囲区画の盛土、1期石囲区画の盛土、表土に大別できる。最下層は整地層であり、部分的ではあるがブラックバンドが確認された。2期石囲区画の盛土は中央部の版築状の盛土とそれを切る盛土に分けることができる。1期石囲区画の盛土は塚上部を覆う盛土である。

今回の調査によって、中世から近世に至る塚の構造の変遷を確認することができた。塚盛土直下の地山は中央部が平坦に成形されており、石囲土坑が検出された。地山と土坑から遺物が全く出土しないため明確な時期は確定できないが、中世以前と考える。埋葬施設が検出されなかつたので古墳の可能性は少ない。中世中頃以降に最下層の整地により塚の基盤ができ、版築状の盛土が形成され、2期石囲区画が構築された。盛土からは中世中頃以降の土器が出土し、表土と盛土上層から出土した石造物の製作年代が15～16世紀であり、この区画内に造立されていたと考えられる。近世になると2期石囲区画を拡張するように1期石囲遺構が構築され、盛土から中世の土器や古墳時代の須恵器と一緒に近世陶磁器が多く出土した。特に裏込みより18世紀以降と比定される「三島手」の陶器碗(5)が出土したことは1期石囲区画の実年代を確定する根拠となる。

総合的に判断して、紙漉5号塚は中世(15世紀前半)に形成され、近世末から近代に再度形成され、現在まで塚として存在していた。

### 第2節　遺物

石造物は、コンクリート製祠に納められていた1～3、試掘調査で表土から出土した4と今回の調査において1期石囲区画の盛土頂上で出土した23～31がある。1・4は宝鏡印塔、2・3・23～30は五輪塔、31は不明である。石材はすべて凝灰岩であり、天霧石が1・4、豊島石が2・3・26、八栗石が23・25、五夜嶽石が24・27～30、火山石が31である。石囲遺構の側石は八栗産の凝灰岩である。これらの形態から年代を判断できるものがある。1の宝鏡印塔台石は高台上面に1段の段を巡らせていることから15世紀前半のものである。1と4はセット関係であると考えられる。24と28は16世紀のものである。27は四隅の傾斜角度により室町時代のものと考えられ、その規模から29とセット関係の可能性がある。

表土からは古墳時代中期から近代に至る土器が出土し、残存率が高い79をはじめ古墳時代中期の須恵器を含んでおり、周辺に古墳の存在が考えられる。2期石囲区画では近世陶磁器がなく、中世と考えられる土器が多い。1期石囲区画に伴う「三島手」の5、足釜8・9は18世紀以降である。出土した土器や石造物の年代により、中世から現在まで改変を受けながら塚として継承されてきたことが明らかになった。



1 調査前風景（南から）



2 調査前風景（南東から）



1 南北土層（北側）（西から）



2 南北土層（南側）（東から）



1 東西土層（西側）（北から）



2 東西土層（東側）（南から）

写真図版  
4



1 表土断面（南東から）



2 表土断面（西から）



1 1期石圏区画（南西から）



2 1期石圏区画（南から）



1 1期石圏区画（東から）



2 石組遺構・石造物検出（南から）



1 石組造構完掘（西から）



2 1期石圓区画撤去（東から）



1 2期石圏区画（南から）



2 2期石圏区画（南から）



1 2期石囲区画（東から）



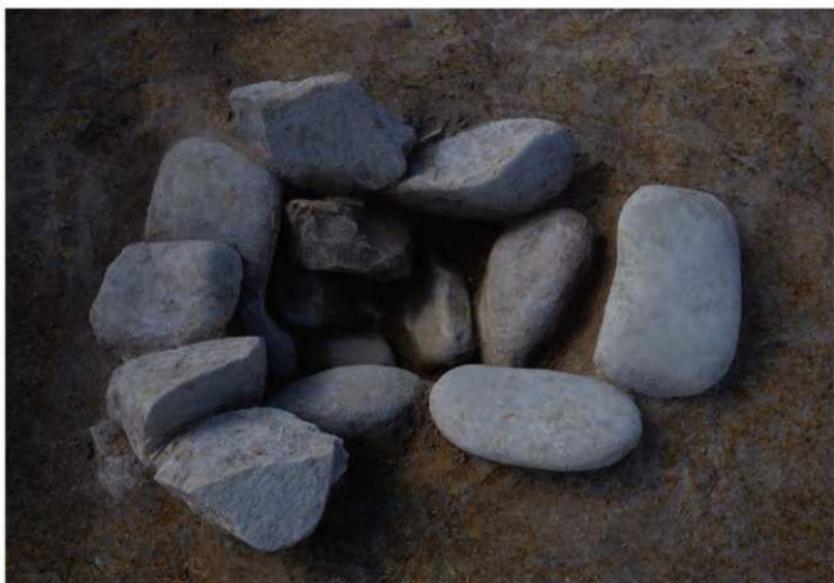
2 2期石囲区画（東から）



1 2期石圏区画（東から）



2 2期石圏区画（南から）



1 石圓土坑（東から）



2 石圓土坑土層（東から）



1 石圓土坑完掘（東から）



2 盛土撤去（西から）

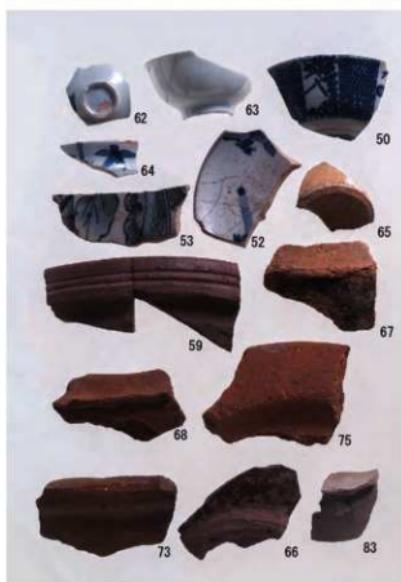
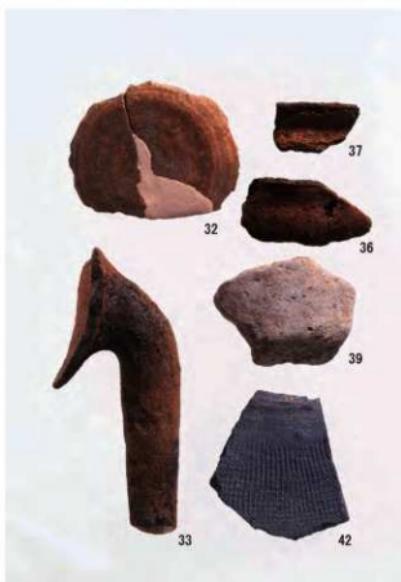


1 盛土撤去（北から）



2 盛土撤去（東から）

写真図版 14



出土遺物



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	かみすき5ごうつか							
書名	紙漉5号塚							
副書名	露天資材置場設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第225集							
編著者名	中西 克也							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087-839-2660							
発行年月日	西暦2021年12月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	発掘原因
かみすき5ごうつか 紙漉5号塚	かがねさん 香川県 たかまつし 高松市 だんしちょう 櫛紙町	市町村	遺跡番号	34° 18' 47"	134° 00' 15"	2021.1.13~30	28m <sup>2</sup>	露天資材 置場設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
かみすき5ごうつか 紙漉5号塚	塚	中世 ～ 近世	石団区画 土坑	陶磁器・土師質土器・ 須恵質土器・須恵器・ 石造物		石団区画		
要約	高松平野西部に所在する塚の発掘調査である。1期石団区画は近世、2期石団区画は中世と考えられ、中世から近世に形成された塚である。しかし、表土と盛土中より古墳時代中期の須恵器が出土することから、周辺に古墳が存在する可能性も考えられる。塚としての性格は現代まで機能していた。							

高松市埋蔵文化財調査報告第225集

露天資材置場設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

### 紙漉5号塚

2021年12月24日

編集 高松市教育委員会  
 高松市番町一丁目8番15号  
 発行 (株)タニモト  
 高松市教育委員会  
 印刷 有限会社中央ファイリング